



1930年代にモンゴル人民共和国から逃亡してきた兄と、その後エゼネ旗で産まれた妹



石炭を積載したトラックと、モンゴル国から運び込まれた石炭の山

かつてはラクダによって  
国境を越える交易がおこなわれた



### 命の保障から迫害へ

同じ民族でありながら、中国とモンゴル国というふたつの国に分断されたモンゴ

## 時代を映す鏡 —中国とモンゴル国の 国境の町から

児玉 香菜子  
(こだま かなこ)

総合地球環境学研究所  
拠点研究員

ル族にとって国境がもつ意味は時代とともにめまぐるしく変化してきた。

中国内モンゴル自治区はモンゴル国と長い国境をもつ。そのなかでもモンゴル国ともっとも長い国境をもつのが内モンゴルの最西端に位置するエゼネ(額濟納)旗だ。

エゼネ旗は広大なゴビにその上流に降った降雪雨が河川となつて流れ込むことで、オアシスが形成されている。ゴビに形成されたオアシスは東西、南北を結ぶ交通と軍事の要衝であつた。

エゼネ旗にはエゼネトルゴードとよばれる人びとをはじめ、さまざまな出自をもつ人びとが住んでいるが、なかでも多いのがモンゴル人民共和国(現モンゴル国)に出自をもつ人びとである。というのは、

一九三〇年代、多くの人びとが人民革命後の宗教弾圧を逃れて中国へ亡命してきたからである。彼らにとって、国境は命を保障する「境」であつた。

その後、一九六〇年代よりはじまる中ソ対立によって、国境がもつ意味が大きく変化する。軍事的な緊張が高まるにつれて、国境が完全に遮断され、多くの軍人が駐在するようになる。まさに国境は軍事的なシンボルであつた。現在でも、当時の塹壕(どんごう)を国境近くで散見できる。

一九六六年からはじまり一〇年間にわたつて吹き荒れた政治的混乱、文化大革命では、モンゴル人民共和国から亡命してきた人びとの多くがスパイとして迫害された。また、モンゴル国とやりとりをしていた人、訪問したことがある人も迫害

の対象となつた。皮肉にも、命を保障する国境が迫害の原因となり、政治的な象徴となつたのである。

### 経済的な窓口として

次いで、一九八九年、中ソ和解によって国境が開かれるようになると、エゼネ旗の国境は経済的な窓口となる。モンゴル国から畜産品をもつた多くの人がやってきて、さまざまな日用品を大量に買い込むようになったのである。

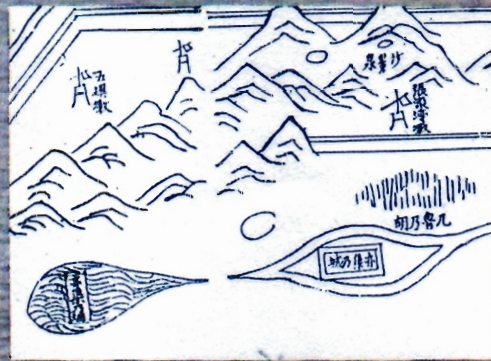
現在、中国政府は環境破壊を避けるため石炭を輸入に切り替えている。輸入先のひとつがモンゴル国である。エゼネ旗の北に良質の石炭を産出する鉱山があるため、ここが輸入の窓口となつて大量の石炭が運び込まれている。その石炭を中国各地に運搬する大型トラックが押し寄せている。さらに、石炭を運搬するための鉄道の建設が急ピッチで進んでいる。建設作業のための労働者、宿泊施設、食堂など、町が急速に拡大している。鉄路はさらに多くの人を引き寄せるであろう。国境は、いつでも国の政治経済的な状況を反映する鏡であつた。今や、エゼネ旗の国境は激動する中国の象徴となりつつある。

# 国境

特集



# 消えたオアシスの湖，居延沢



今から約二千年前、ユーラシア大陸のほぼ中央にある砂漠の中に、居延沢とよばれる大きな湖がありました。そのほとりでは、匈奴とよばれる遊牧民の軍団が当時その軍馬を休ませていたに違いありません。遠く離れた祁連山脈の氷河の融け水が流れ込み、湖畔は鬱蒼とした草木に覆われ、そこは砂漠の中の楽園ともいべきオアシスだったからです。それから二千年後の現在、その湖はすっかりと涸れ上がってしまいました。草木は枯れ、土地は塩に覆われ、河の水も地下水も年々減っています。今このオアシスにいったい何が起きているのでしょうか？

